

◆活動報告

悪循環から好循環に変わった新疆の治安

一般社団法人日中科学技術文化センター理事長 凌星光

“日本華人教授会議”は毎年夏休みを利用して帰国視察団を派遣していて、数年前から新疆視察を希望したが叶えられなかった。今年はOKということで、治安はかなり改善を見ているなど判断した。ここ数年、イスラム国（IS）の出現により、国際テロが猛威を振るっている。ところがここ2年余り、中国全土においてテロ行為が起きておらず、安全性が保たれるようになった。その原因はどこにあるのか。今回の新疆視察で答えを得ることができた。

2009年7月5日、新疆ウイグル自治区の区都ウルムチで「七・五新疆事件」が起きた。新疆の漢民族とウイグル族とが衝突し、197人が死亡するという大事件で、胡錦濤国家主席はフランスでのサミットに参加せず、急遽帰国し暴動の鎮静化に努めた。当時、漢民族とウイグル族との矛盾、政府とウイグル族との矛盾は、相互不信が増幅する悪循環に陥っていたと思われる。

その原因は二つ考えられる。一つは改革開放政策によって門戸が開かれ、国外にいる東トルキスタン系分離独立分子に新疆へ浸透するチャンスを与えたことである。二つ目は社会主義市場経済を進める中で、市場主義が優勢を占め、貧富の格差が拡大していった。それは自治区政府の責任者が少数民族政策をしっかりと実行しなかったことにもよる。このような矛盾が20年累積され、2009年に爆発したのである。

相互不信の悪循環を如何に断ち切るか、如何にして好循環に転換させるか、が政府に課せられた大きな課題となった。2010年初め、張春賢書記が赴任して、2010年5月に第一回新疆工作座談会が開かれ対策が練られた。当局は「治標治本」（当面の問題を解決すると同時に、根本的解決も図る）、即ち安全確保のためのテロ・暴力対策を強化するとともに、根治のための貧困消滅、少数民族政策の貫徹を図った。内地の経済的に裕福な省市に新疆支援のカウン

ターパートナーを統一的に組ませた。例えば、カシュガル地区は深圳、広東省、上海、山東省が、伊犁地区は江蘇省が、和田地区は浙江省がカウンターパートナーとなって支援するというわけだ。

新疆を支援する各省市は財政予算の1-3%を拠出して支援することになっており、一般には1.5%くらいを拠出しているとのことであった。これらの省市はかなり高い成長率を遂げてきたため、毎年の支援額はかなりの額で増えていった。財政的支援ばかりでなく、人材の養成、幹部派遣などソフト面での支援も行われる。こうして経済発展面での改善は図られたが、根治には繋がらなかった。それは雲南省で起きた無差別テロに表れている。

2014年3月1日、中国雲南省昆明市の昆明駅で、刃物を持ったグループが無差別に通行人を切りつける事件が起きた。29人が死亡、130人以上が負傷する無差別殺傷事件である。当局は「現場の証拠」から、新疆ウイグル自治区の分離を目指す勢力による「組織的なテロ」と断定した。新疆自治区の張春賢書記は新疆の治安を抜本的に改善するには、南新疆の末端組織を立て直さなくてはならないと決断し、2014年2月14日、「訪民情、惠民生、聚民心」活動を展開する動員報告を行った。

これは略して「訪惠聚」活動とも言うが、「訪民情」とは訪問を通じて民情を把握する、「惠民生」は住民の生活改善を図って恩恵をもたらす、「聚民心」は民心を党と政府の周りに結集する、という意味である。新疆自治区20万人の幹部が、順番に1万の村に工作隊として一年間駐屯し、村の面目を一新させ、長期にわたって良き治安が維持される新疆にしようというのだ。一工作隊は4-7人からなり、ウイグル族の幹部と漢民族の幹部で構成される。市場経済が発展した今日、庁長、局長クラスの高級幹部も、生活レベルの低い農村に1年間駐屯して、牧農民の生活改善を図る。これは大変な決断で

あるが、張書記は新疆の「特殊な情勢に対処するためにとった重大措置」として断固貫徹したのである。

われわれ視察団を案内してくれた王傑氏は漢民族だがウイグル語もとても達者で、カシュガル市のウイグル族から親しまれていた。彼も昨年、第二陣としてある村に赴き工作隊長として一年間駐屯した。主要な任務は、社会の安定、貧困脱皮、党支部づくりの三つで、世帯ごとに対話し、教育し、裕福になる道を探るという経験を紹介してくれた。生活向上プランの作成を手伝い、それに必要な資金援助を政府に申請することも手伝った。

新疆では、行く先々で、「私は一年目だ」、「二年目だった」、「彼は三年目で今年は職場にいない」といった言葉を耳にした。「訪恵聚」はかなり徹底して行われていることが感じられた。三年目に入った今年、順番で農村に行っているカシュガル地区外事弁公室主任は、数時間も費やしてわざわざ市内に戻って来て、我々と会見を果たした後すぐに村へ帰って行った。カシュガル地区の幹部は大体、この地区の村に派遣されるが、ウルムチとか北新疆の幹部は、遠い南新疆に派遣されることがあると言う。南新疆はウイグル族が集中しており、貧困な村が多いからだ。

この「訪恵聚」活動は大衆路線教育実践活動の一環として行われたものだが、中国共産党の革命時代の「訪貧問苦」（貧農を訪問し、なぜ生活が苦しいかを悟らせ、革命のために奮起させる）や1960年代の経済困難期の農村工作隊派遣を彷彿させる。中国共産党の良き伝統の復活である。交通の便が良くなった内地では一年駐屯は必要なくなったが、土地が広く交通の便が悪い新疆では必要な措置だったのである。習近平は2014年4月末に新疆を視察したが、村に入って間もない第一陣工作隊から事情を聞き、「強固な末端政権」を建設しなくてはならないと激励した。

この工作隊の派遣が、新疆の治安と経済の改善に大きく貢献したことを実感した。単にお金を注ぎ込んで、消費に回ってしまい、貧困からは脱皮できない。北新疆の他の少数民族からは、怠惰な人間を支援しても無駄だ、困らせて自分で立ち上がるようにしなければ駄目だ、という意見も聞かれたとのことだ。工作隊が住民に如何に生活し、仕事をするかを教え、貧困者

が希望を持つようになると、生活への姿勢も変わっていった。その結果、外部からの過激思想が浸透する余地はなくなり、治安は改善され、社会生活に活気が出て来た。悪循環から好循環に転換したきっかけは、この「訪恵聚」にあったのだ。

国際的テロが横行する中、新疆では分離独立分子のテロへの警戒を怠ってはいない。蟻一匹も見逃さないという厳戒態勢が敷かれている。公共施設ばかりでなく、どのホテルも安全検査設備が置かれ、ホテルに入る都度持ち物の検査を受ける。空港ではエリア入り口で車内検査、空港入り口で荷物検査、搭乗前の身体検査の三重検査が行われている。一般には搭乗検査だけだから、余分の検査が二回あるわけだ。

今回、パキスタン、タジキスタン、カザフスタンに通じる国境玄関口（「口岸」と呼ぶ）三ヶ所に足を運んだ。パキスタンはテロ組織が活動しているところで大変厳しかった。撮影禁止で、メモをとることも注意された。カザフスタンは経済交流が盛んで国境の町は建設ラッシュで沸いていた。それでも、国境に向かう場合、車の安全検査を何回か受けなくてはならない。ウルムチではところどころに武装警官隊が駐屯していた。（中国国内ではテロに対する措置が厳重であるため、今年8月30日、テロ勢力はキルギスの中国大使館を狙った。）

日本から行くと余りにも物々しく感じ少し緊張感を覚えるが、土地の人や中国人観光客は、これだから安心できると却って歓迎する姿勢を示す。因みに新疆への観光客は8月末時点で8000万人に達し、年末までに1億人を超すと見込まれている。主要な客は全国からくる中国人観光客だが、中央アジアやヨーロッパの観光客も増えているようだ。日本人観光客はほとんどなく寂しいという声が聞かれた。

悪循環から好循環に転換しつつある新疆を見て、ユーラシア大陸の今後の繁栄を確信するに至った。中央アジアや中近東で起きているイスラム過激派の国際テロはそのうちに収束するであろう。それには、中国のテロ対策成功の経験を周辺諸国に如何に生かすかが問われる。今後の課題だ。